

# 授業内役割の認知が学習情報収集・分析の 自信につながるプロセスの検討

Study of the process that recognition of roles in class leads to confidence in learning  
information collection and analysis

有 吉 美 恵

## 要旨

本研究の目的は、授業内の役割認知が学校生活の自信におよぼす影響を明らかにすることである。本研究では大学生 166 名を対象とした質問調査を行った。分析の結果、授業内役割認知が課題・目的の存在認知を高め、学習の情報収集と分析に対する自信につながる事が明らかとなった。その関係には、達成志向モチベーションが媒介していた。本研究の結果は、学生がより良い大学生活を送るうえで必要な要因について示唆している。

キーワード：授業での役割，課題・目的の存在，達成志向モチベーション，学習情報の収集と分析

## 問題と目的

**大学生活への適応に関わる要因** 感染症の拡大などによって（文部科学省，2020）<sup>1)</sup>、学生と教職員、および学生同士の直接的な交流が阻害された状況においては、大学生活への適応が危ぶまれる（鈴木，2020）<sup>2)</sup>。

学生生活において、学期開始の時期や新たに履修した授業に参加するにあたり、学生は新たな環境への適応を試みる。先行知見によると、仲間志向（大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石，2013）<sup>3)</sup> であることや、社会的スキルの高さ（大久保・青柳，2005）<sup>4)</sup> などが適応を促すことが明らかとなっている。一方で、大学生活への期待と現実のギャップは学生生活からの脱却の可能性を高め（千島・水野，2015）<sup>5)</sup>、不本意入学が不適応を生じさせる要因のひとつとして指摘されている（山田，2006）<sup>6)</sup>。

学校生活への適応を促す要因として、学内活動への参加（岡田，2009）<sup>7)</sup>の効果が参考になる。岡田（2009）は、中学生を対象とした質問紙調査を行い、部活動を中心とした友人関係の構築が行われることを示している。また、浅木・奥野（2018）<sup>8)</sup>は、環境における役割感が居場所感を高めることを示唆している。これらのことをふまえると、所属している集団において何らかの活動に参加することは、参加者自身の居場所を認知させ、現在いる集団への適応を促すと考えられる。

そこで本研究では、大学生生活への適応を促す要因として、授業での役割の認知が学生生活への適応におよぼす効果を検討する。

**授業内での役割と課題・目的の存在** 個人が有する役割について、役割に自身の態度や行動を合わせようとする役割の整合化が招く、集団の危機的状況（Zimbardo, Harney, Banks & Jaffe, 1977）<sup>9)</sup>や、複数の役割期待による役割葛藤（稲葉，1995）<sup>10)</sup>について議論されている。一方で、役割は社会的・心理的な報酬をもたらす可能性もある（Baruch & Barnett, 1986）<sup>11)</sup>。土肥・広沢・田中（1990）<sup>12)</sup>は、多重役割でも役割の達成感を感じていれば満足度が向上することを指摘している。大学生活における役割とはたとえば、部活動やボランティアなど課外活動における役職や活動そのものの中での役割などが該当する。このような役割は、授業の中においても存在しうると考えられる。たとえばグループワークにおいては話題の提供や司会進行役が、授業の流れの中では友人や教員とのやり取りが該当するだろう。

大学生生活の適応について、大久保・青柳（2003）<sup>13)</sup>は、大学生の適応感尺度を作成し、快適さや心地よさ、被信頼・受容感のほかに、課題や目的の存在による充実感といった要因に分類している。中でも大学生活における課題や目的を学生自身が見出すことは、大学生活を継続していくモチベーションを維持するうえで重要であると考えられる。目標設定について、目標への関与、すなわち目標コミットメントが重視される（Latham, 2012）<sup>14)</sup>。Latham（2012）によると、目標コミットメントがあるときに職務業績があがるのは、目標を達成するための職務上の行動に従業員が観察し、監視し、主観的に評価し、調整するためのメカニズムとして目標が機能するからである。この概念によれば、目標への認知は、自発的に行われることでより良いパフォーマンスへつながると考えられる。この課題・目的の存在を認知させるにはどのような要因が関係しているのかについて、目標設定スキル獲得に関する知見が示唆を与えてくれる。たとえば、上野（2006）<sup>15)</sup>は、運動部活動への参加を通じた目標設定スキル獲得に対し、講義および調査を介した取り組みを行い、目標設定スキルの向上を示している。この取り組みは、個人が目標設定スキルの獲得には、他者からの働きかけが有用であることを示唆している。Latham（2012）の目標コミットメントの概念をふまえると、自己関与的に、グループワークでの話題提供や資料配布の手伝いなど、学習活動について関わることや、授業内で担う役割を通して他者と交流することで、授業に関する理解をより一層深め、自分なりに課題や目的を見つけると考えられる。

これまでの議論より、仮説を導いた。

仮説1 授業において役割を担うことで学校生活での課題・目的の存在を認識するだろう

本研究では、授業内の役割が学生に及ぼす心理的側面としてポジティブな影響に着目する。

**達成志向モチベーションと学校生活における自信** 目標を持つことは、モチベーションの維持と向上につながることを指摘されてきた (Latham, 2012; Locke & Latham, 1990<sup>16)</sup>)。目標を持つことで、その目標に向かって物事をやり遂げようとする達成志向モチベーションが高められる。また、モチベーションの高まりは、次なるステップのパフォーマンスを高める。有吉・池田・縄田・山口 (2018)<sup>17)</sup> は、コールセンターのオペレーターを対象とした調査を行い、達成志向モチベーションが高まることでより良い顧客対応につながることを示している。このように、粘り強く物事をやり遂げようとするモチベーションは、個人が置かれた環境においてより高いパフォーマンスへ導くと考えられる。

学校生活においては、何らかの課題や目標を持ちモチベーションを高く保つことで、学校生活を過ごす自信につながると考えられる。たとえば、物事を達成させようとするには、まず目標を持ち、達成させるための正しい知識や情報を、自信を持って集めることが重要である。学生の情報収集と行動の関係については、就職活動の文脈においても議論されている。安達 (2008)<sup>18)</sup> は、学生のキャリア探索行動について、目標が明確に定まらない場合には積極的な探索行動に移りにくい可能性を示唆している。これは、目標が定まらないことで、自信を持てていない状態を示唆している。Erikson (1959)<sup>19)</sup> は、アイデンティティをある種の自信と位置づけており、他者から認められ、自分が自分であるという感覚としている。この自信は、他者からの承認が関連する点において、他者との関わりにおいて醸成されるものと考えられる。また、目標をやり遂げようとする達成志向のモチベーションが、さらに行動への自信を促す。たとえば、有吉ら (2018) は、ワークモチベーションが職場における適切な対応を促すことを示している。このことから、学習に関する情報収集についても、課題や目標が明確であり、達成志向モチベーションが高ければ、学習情報収集を自信を持って行えると考えられる。

ここまでの議論より仮説を導いた。

仮説2 課題・目的の存在が学習の情報収集への自信を高める関連に達成志向モチベーションが媒介するだろう

## 方法

### 調査対象者と手続き

愛媛県内の大学生 166 名を調査対象者とした。対面授業が部分的に開催された 2020 年 6 月初旬に、取り組みとして、2 か月間、授業内で担った役割の回数を数え覚えておくよう教示した。前学期授業の最終回に、役割の回数を尋ねる旨を伝えた。

取り組みの前後で、授業における自分の役割、課題・目的の存在、達成志向モチベーション、学習の情報収集と分析に対する自信について、質問紙調査を行った。

## 質問項目

フェイスシート 性別、学年および年齢について尋ねた。

授業における自分の役割 事後の質問紙調査にて、授業において学生自身が引き受けた役割について、「グループワークで司会進行役」、「他の学生を助けた」、「授業で話題提供をした」、「悩み相談を受けた」、「資料配布を手伝った」、各項目について、当てはまるものすべてを選んでもらい、それぞれの回数を報告してもらった。

達成志向モチベーション 池田・森永（2017）<sup>20)</sup> の多側面ワークモチベーション尺度の中から達成志向モチベーションを用い、回答者自身の授業での様子について「私は、自分に与えられた活動を完了することに大きな意義を感じて、活動に従事している」など5項目について「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの5件法で尋ねた。

課題・目的の存在 大久保・青柳（2003）の適応感尺度の中でも課題・目的の存在（「やるべき目的がある」など3項目）について「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常によくあてはまる」までの5件法で尋ねた。

学習の情報収集と分析に対する自信 藤村・池田・古川（2006）<sup>21)</sup> の就業に向かう自信尺度の中の就職情報の収集分析因子を参考に、「学習について集めた情報を自分なりに整理する」など3項目について「1. 全く自信がない」から「5. 非常に自信がある」までの5件法で尋ねた。

## 結果

### 記述統計量

調査参加者は、事前調査において、男性95人、女性59人、未回答6人であった。1年生は48人、2年生は45人、3年生は43人、4年生は23人、未回答1人であった。平均年齢は19.44歳（ $SD = 1.16$ ）であった。事後調査においては、男性80人、女性49人、未回答37人であった。1年生は47人、2年生は48人、3年生は46人、4年生は25人であった。平均年齢は19.64歳（ $SD = 1.15$ ）であった。

### 授業内役割の回数

授業内役割の回数について内容ごとに見ていく。事前の調査においては、対人援助的項目については、他の学生を助けた（25人、計25回）、悩み相談を受けた（4人、計4回）であった。一方で、授業そのものに関する項目については、グループワークで司会進行役（18人、計18回）、授業で話題提供を

した（23人，計23回），資料配布を手伝った（34人，計34回）であった。

事後の調査においては，対人援助的項目への回答が多く見られ，他の学生を助けた（60人，計85回），悩み相談を受けた（40人，計60回）であった。一方で，授業そのものに関する項目については，グループワークで司会進行役（32人，計42回），授業で話題提供をした（32人，計43回），資料配布を手伝った（36人，計51回）であった。

他の学生を助けたという具体的内容として，「授業が対面で行われることを教えた」「授業が行われる教室を教えた」「受講システムの操作を教えた」などが見られた。

### 各尺度変数の信頼性係数

用いた尺度変数の平均値および信頼性を検討した。事前調査で使用した尺度変数については，課題・目的の存在は， $\alpha = .85$ ，達成志向モチベーションは $\alpha = .76$ ，情報収集分析の自信は $\alpha = .76$ であった。事後調査で使用した尺度変数については，課題・目的の存在は $\alpha = .81$ ，達成志向モチベーションは $\alpha = .80$ ，情報収集分析の自信は $\alpha = .86$ であった。

### 各尺度変数間の要約統計量および相関

学年，事前と事後それぞれの項目平均間の相関分析を行った（表1）。

学年と課題・目的の存在は負の関連であった（事前 $r = -.28$ ， $p < .01$ ；事後 $r = -.29$ ， $p < .01$ ）。事前事後ともに授業内役割回数は，課題・目的の存在と正の関連にあった（事前 $r = .17$ ， $p < .05$ ；事後 $r = .20$ ， $p < .01$ ）。また，事後の授業内役割回数は事後の学習の情報収集分析の自信と正の関連が見られた（ $r = .18$ ， $p < .05$ ）。事前事後ともに課題・目的の存在は，達成志向モチベーション（事前 $r = .38$ ， $p < .01$ ；事後 $r = .48$ ， $p < .01$ ）および学習の情報収集分析の自信（事前 $r = .27$ ， $p < .01$ ；事後 $r = .40$ ， $p < .01$ ）と正の関連が見られた。

表1 事前および事後調査各要因の要約統計量および相関

	平均	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 学年	2.26	1.04	-								
2. 事前_授業内役割回数	.74	.63	-.11	-							
3. 事前_課題・目的の存在	3.53	.85	-.28 **	.17 *	-						
4. 事前_達成志向モチベーション	3.15	.75	-.14 +	.14 +	.38 **	-					
5. 事前_学習の情報収集分析の自信	3.21	.84	.09	.15 +	.27 **	.50 **	-				
6. 事後_授業内役割回数	1.71	1.98	-.11	.11	.04	-.03	.07	-			
7. 事後_課題・目的の存在	3.48	.92	-.29 **	-.01	.12	.05	.05	.20 **	-		
8. 事後_達成志向モチベーション	3.08	.89	-.10	.02	.10	.05	.10	.13 +	.48 **	-	
9. 事後_学習の情報収集分析の自信	3.17	1.01	-.05	.10	.01	.00	.10	.18 *	.40 **	.61 **	-

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

## 授業内役割の有無による課題・目的の存在，達成志向モチベーション，学習の情報収集分析の自信それぞれの要因前後比較

介入的取り組みによって各要因に前後差が見られたかを検討するため，授業内役割の有無で群分けして（授業内役割有 = 1，無 = 0；参加者間），課題・目的の存在，達成志向モチベーション，学習の情報収集分析の自信についてそれぞれ，事前調査のデータと事後調査のデータ（参加者内）を組み合わせ，役割の有無とそれぞれの事前事後評価を独立変数とした  $2 \times 2$  の 2 要因混合計画での分散分析を行った。

その結果，達成志向モチベーションにおいては，役割有無の主効果 ( $F(1, 155) = 3.02, p < .10$ ) と交互作用 ( $F(1, 155) = 3.07, p < .10$ ) に，有意傾向が見られた。課題・目標の存在においては，役割有無に有意傾向の主効果が見られた ( $F(1, 158) = 2.76, p < .10$ ) が，有意な交互作用は見られなかった。学習の情報収集分析の自信については，有意な主効果や交互作用は見られなかった。

有意傾向が見られた達成志向モチベーションについて，役割の有無における事前と事後の単純主効果の検定を行った（図 1）。

その結果，授業内役割なし群において達成志向モチベーションの事前と事後で有意な差があり ( $F(1, 155) = 2.03, p < .05$ ) 事後において低下が見られた。

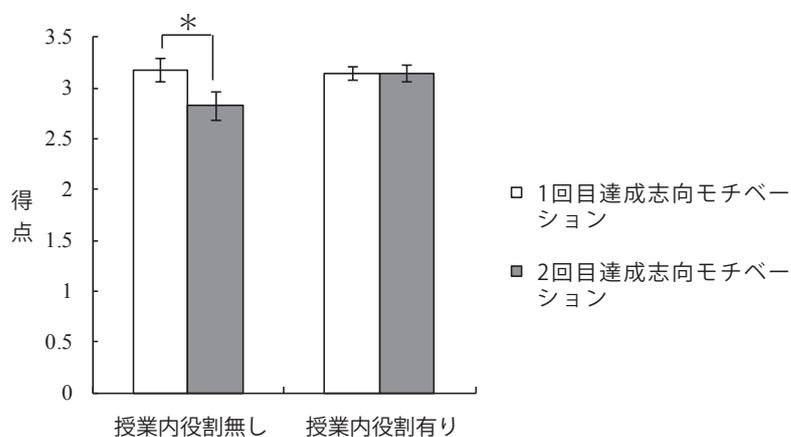
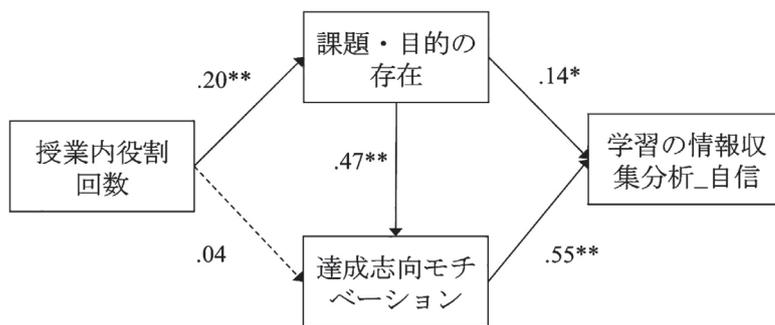


図 1 授業内役割の有無が達成志向モチベーションの差を予測する関係

## 構造方程式モデリングによる影響過程の検討

本研究において構築した仮説検討に基づくパス図の影響過程について，HAD（清水，2016）<sup>22)</sup> を用いて検討した。最尤推定法によって母数の推定は最尤推定法を用いた。構造方程式モデリングの結果を図 2 に示す。適合度指標は，CFI = .992，RMSEA = .078，SRMR = .022 であり，十分な適合を示した。



Note. 適合度は  $\chi^2 = 2.01, df = 1, p = .157$ ; CFI = .992; RMSEA = .078, SRMR = .022 である。実線は有意なパス ( $p < .05$ ) であり，点線は非有意なパスである。

図 2 授業内役割によって高まった課題・目的の存在が学習の情報収集分析の自信を高める関係を達成志向モチベーションが媒介する関係

まず、各パスの標準化推定値を用いて、授業内役割回数から達成志向モチベーションに影響するパスについて検討した。その結果、有意な影響は見られなかった ( $\beta = .04, n. s.$ )。次に、各パスの標準化推定値を用いて、授業内役割回数から課題・目的の存在へと影響するパスについて検討した。その結果、 $\beta = .20, p < .01$  となり、有意であった。次に、課題・目的の存在から学習の情報収集分析への自信にのびるパスの係数は、 $\beta = .14, p < .05$  であり、有意な正の効果が見られた。課題・目的の存在から達成志向モチベーションへのパスは  $\beta = .47, p < .01$  であり、達成志向モチベーションから学習の情報収集分析の自信へのパスは  $\beta = .55, p < .01$  であった。

さらに、仮説に関わる媒介過程を直接検定するため、媒介分析を行った。はじめに、課題・目的の存在から学習の情報収集分析への自信について検討したところ、直接的な影響力は比較的強かった ( $\beta = .40, p < .01$ )。次に、達成志向モチベーションを媒介変数として投入した。その結果、課題・目的の存在から達成志向モチベーション ( $\beta = .48, p < .01$ )、達成志向モチベーションから学習の情報収集分析への自信 ( $\beta = .55, p < .01$ ) には正の影響が認められた。そして、課題・目的の存在から学習の情報収集への自信への直接的な影響は認められなくなった ( $\beta = .14, n. s.$ )。

## 考察

本研究では、授業内役割の認知が学校生活における自信につながる心理プロセスを明らかにすることを目的とし、授業内での役割、課題・目的の存在およびモチベーションに着目し、仮説1：授業において役割を担うことで学校生活での課題・目的の存在を認識するだろう、仮説2：課題・目的の存在が学習の情報収集への自信を高める関連に達成志向モチベーションが媒介するだろう、といった二つの仮説について検討した。

まず、相関分析の結果から考察する。学年が上がると課題・目的の存在が低下する関連が見られたことについては、次の通り考察する。初学年のうち、何かしらの目標や期待を持って入学する。しかし、学年が進むごとに当初持っていた目標や期待が自分にそぐわなくなり、次なる目標を模索している状態が続いている、もしくは目標を持っていたがその目標に向かって学習などをうまく進めることができている状態に直面することが考えられる。このような学生に対しては、目標を定めるべく将来のキャリアについて考え、目標に向かって具体的にどのように活動を進めていくかを、明確にさせるような働きかけが随時必要であると考えられる。

次に、分散分析の結果について考察する。授業内役割の認知が達成志向モチベーションの変化に直接影響を及ぼさなかった理由として、次のように考えられる。授業内の役割の中でも、他の学生を助けた、悩み相談を受けたという対人援助的項目への回答が多く見られた。この結果から、多くの学生が授業の中で関わる友人やクラスメイトのために役立とうとしたと考えられる。しかし、授業内役割

なし群においては、達成志向モチベーションが低下したことから、授業内役割の認知は、相対的に、授業内役割あり群の達成志向モチベーションを維持させたと考えられる。この結果は、有吉ら（2018）が明らかにしている、社会的貢献感がモチベーションを高める関係と類似のものであると言える。授業を通じて友人やクラスメイトとのつながりを感じ、また、授業の中で自身の力を発揮することで、授業をやりとげようとするモチベーションが維持されたものと考えられる。

最後に、仮説に基づき得られた結果について考察する。仮説1については、構造方程式モデリングの結果により支持された。授業内の役割を認知することで、授業そのものの価値や、参加することに関わる他者とのつながりについて強く認識し、授業における自分と他者の存在がより明確に意識され、授業という場と周囲の他者との比較から自身が客観的になすべきこと、すなわち課題や目的が認知されるものと考えられる。また、授業内の役割を認知することは、直接的に達成志向モチベーションの向上につながるものではなかったことから、授業内の役割を認知することで、まず自身が行うべきことについての目標などが先に認識されると考えられる。

仮説2についても、構造方程式モデリングによって支持された。まず、課題や目的の存在が明らかになっている状態は、学習についての情報収集への自信を醸成するものになっていると考えられる。この関係は、Locke & Latham（1990）の、ワークモチベーションの理論に沿う結果となった。さらに、課題や目的の存在が学習についての情報収集への自信につながる関係に、粘り強くやり抜こうとする達成志向モチベーションがさらに媒介している。この関係は、Locke & Latham（1990）が主張している、目標設定理論について、パフォーマンスとして新たに自信の醸成を位置づけたといえる。何か課題や目標を持つに至っても、情報収集という行動に自信を持って臨むためには、それをやり抜こうとするモチベーションが必要であることが示唆されている。有吉ら（2018）は、上司から部下へのポジティブなフィードバックが他者への役立ちの認知である社会的貢献感を高め、ワークモチベーションの向上につながることを明らかにしている。これと同様に、学生が何か目標を持って活動に勤しんでいるときにも、周囲の人々が声をかけるなどして、状態に応じたフィードバックを行うことが必要であると考えられる。このようなことを鑑みると、同じ目標を持った集団形成の有効性についても、今後検討していく必要がある。

## 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界を述べる。本研究においては、授業内で担った役割の回数が、課題や目標の存在の認知を高めることを示した。しかし、授業内の役割がどのような心理プロセスを経て課題や目標の認知に至るのかについては明らかになっていない。今後の研究においては、心理プロセスについても明らかにする必要がある。

また、課題や目標を持つことが重要とされ、行う活動についての情報を集め分析しながら進めてい

くような場面は、大学生活のほかにも考えられる。たとえば、職場においては、現在行っている業務の内容を把握しつつ、次の業務を行うためにどのような手法で、何を使って、どんな人に疑問点を尋ねるかなど、必要な情報を集め利用するであろう。このように、学校生活の他の場面にも、自身が何らかの役割を担っていることを認識することの効果をあてはめて考えることができる。今後は、職場やボランティア活動など、ほかの活動についても、役割の認識とモチベーションやパフォーマンスの関係を検討することが必要である。

今回の調査は、対面授業に参加する学生を対象としたものであった。今後、インターネットを用いたりリモート授業が広く活用される可能性もあることから、オンライン上での役割の認知の在り方や、適応およびパフォーマンスの関係を検討することも重要である。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：「学校に関する状況調査，取組事例等」新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について，2020.  
[https://www.mext.go.jp/content/20200915\\_mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)（2020年9月20日アクセス）
- 2) 鈴木洋子：「大学生『もう限界！』，授業オンライン化の大混乱で孤独・睡眠不足・心身不調に」ダイヤモンドオンライン，2020.  
<https://diamond.jp/articles/-/244872>（2020年9月20日アクセス）
- 3) 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二：「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討：第1志望か否か，合格可能性，仲間志向に注目して」青年心理学研究，24，125-136，2013.
- 4) 大久保智生・青柳肇：「大学新入生の適応に関する研究—社会的スキルは後の適応を予測するのか？」人間科学研究，18，207-213，2005.
- 5) 千島雄太・水野雅之：「入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響」教育心理学研究，63，228-241，2015.
- 6) 山田ゆかり：「大学新入生における適応感の検討」名古屋文理大学紀要，6，29-36，2006.
- 7) 岡田有司：「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響」教育心理学研究，57，419-431，2009.
- 8) 浅木海音・奥野誠一：「大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連」立正大学臨床心理学研究，16，21-30，2018.
- 9) Zimbardo, P. G., Harney, C., Banks, W. C., & Jaffe, D. (1977). "The psychology of imprisonment: Privation, power and pathology" In Brigham, J. C. & Wrightsman, L. S. (Eds.) *Contemporary issues in social psychology*. (3<sup>rd</sup> ed.) California: Brooks/Cole. 202-216.
- 10) 稲葉昭英：「性差，役割ストレイン，心理的ディストレス」家族社会学研究，7，93-104，1995.
- 11) Baruch, G. K., & Barnett, R. "Role quality, multiple role involvement, and psychological well-being in midlife women" *Journal of personality and social psychology*, 51, 578-585, 1986.
- 12) 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫：「多重な役割従事に関する研究：役割従事タイプ，達成感と男性性，女性性の効果」社会心理学研究，5，137-145，1990.

- 13) 大久保智生・青柳肇：「大学生用適応感尺度の作成の試み—個人-環境の適合性の視点から」パーソナリティ研究, 12, 38-39, 2003.
- 14) Latham, G. P. *Work motivation: History, theory, research, and practice*. US: Sage, 2012.
- 15) 上野耕平：「運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係」体育学研究, 51, 49-60, 2006.
- 16) Locke, E. A., & Latham, G. P. *A theory of goal setting & task performance*. New Jersey: Prentice-Hall, 1990.
- 17) 有吉美恵・池田浩・縄田健悟・山口裕幸：「ワークモチベーションの規定因としての社会的貢献感：トラブル対応が求められる職務を対象とした調査研究」産業・組織心理学研究, 32, 3-14, 2018.
- 18) 安達智子：「女子学生のキャリア意識——就業動機, キャリア探索との関連——」心理学研究, 79, 27-34, 2008.
- 19) Erikson, E. H. *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press, 1959.
- 20) 池田浩・森永雄太：「我が国における多側面ワークモチベーション尺度の開発」産業・組織心理学研究, 30, 171-186, 2017.
- 21) 藤村まこと・池田浩・古川久敬：「若年者における就業へ向かう自信の構造——大学生の持つ予測自信と実績自信の観点から——」若年者の就業に向かう自信の構造と効果的支援に関する学際的研究, 平成16・17年度科学研究費補助金（萌芽研究）, 2006.
- 22) 清水裕士：「フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73, 2016.

Study of the process that recognition of roles in class leads to confidence  
in learning information collection and analysis

Mie Ariyoshi

**Abstract**

The purpose of this study is to clarify the effect of role recognition in class on self-confidence in school life. We conducted a questionnaire survey of 166 university students. As a result of the analysis, it was clarified that the role recognition in class enhances the recognition of the existence of the task / purpose and leads to the confidence in the information gathering and analysis of learning. And achievement-oriented motivation mediated the relationship. The results of this study suggest the factors necessary for students to lead a better university life.

Keywords: roles in class, existence of issue and goal, achievement-oriented motivation, confidence in learning information collection and analysis